

おらがひと

やなせ ひとし
郷土史家 築瀬均さん



市の郷土史を研究している元小学校教諭の築瀬さんは、定年退職後に東北大学大学院文学研究科へ進学。長年研究していた農村指導者高橋正作^{たかはししょうさく}*1についての論文で、今年3月に博士号を取得しました。

遠距離通学を7年続けながら研究に打ち込んできた築瀬さんに、研究にかける思いや原動力を聞きました。

*1高橋正作(1803 - 1894) …江戸時代から明治時代にかけて雄勝地域で活躍した農村指導者。天保の大飢饉(1833年)の際には、桑崎村(現湯沢市小野)の肝煎(村長)として私財を投じ、村人550余人を救った。また、近隣の村々に炭焼きを奨励し、院内銀山に供給。木炭不足で閉山寸前だった院内銀山が復活し、日本一の銀算出量を誇るまでに再興させた。

先人に学び 未来へ受け継ぐ献身の心

— 大学院進学のきっかけを教えてください

定年退職する直前の2018年の夏、金足農業高校野球部の甲子園での活躍を見て、最後まで諦めない姿に心を動かされたんです。生徒たちの精神の原点は何かと考えたとき、同校の創立に貢献した石川理紀之助^{いしかわりきのすけのすけ}*2に行き着きました。そして、その石川が人生の師と仰いだ高橋正作をあらためて研究し伝えていきたいと思い、進学を決めました。

*2石川理紀之助(1845・1915)：秋田の「農聖」と称された農村指導者。生涯を貧農救済に捧げ、米質改善指導や秋田県種苗交換会の設立など、県の農業の振興に大きく貢献した。

— 高橋正作という人物のどのような点に魅力を感じましたか

天保の大飢饉の際、全ての私財を投じて食糧を確保し、自らの命を捨てる覚悟で村人たちの命を守った自己犠牲の精神、生き方に強く惹かれました。

— 研究を進めていく中で苦労したことは何ですか

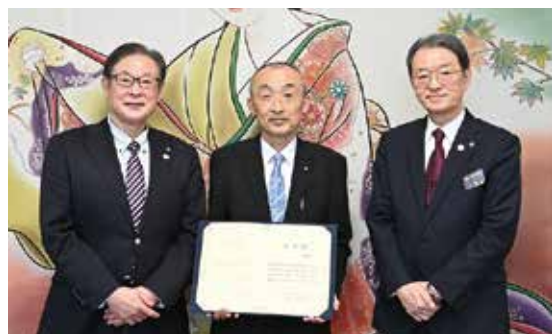
初めて論文を提出した際、当時

の准教授に「これは論文ではなく伝記。論文には根拠が必要」と言われ、正確な人物像を把握するために膨大な文献に目を通さなければなりません。非常に骨の折れる作業でしたが、歴史的な背景や、正作を支えた家族の存在など新たに判明したことも多く、理解が深まってうれしかったですね。

— 大学院には長期履修制度^{*3}を利用して7年間通われたとのことですが、その原動力は何ですか

自らを顧みず、大飢饉から郷土を死守した正作の精神を伝えなければ、という使命感が強かったです。

— 通い始めた当初は、周りが若い学生ばかりで、あまりにも世界が違いすぎて焦りました(笑)。他の学生の研究発表を聞いても全く理解できませんでしたが、予習を重



▲市長表敬訪問の様子
左から佐藤市長、築瀬さん、武石教育長

ねることで徐々に理解し、楽しめるようになりました。

論文執筆や手続きで忙しかった昨年12月には、体調を崩してしまいました。使命感を胸に、なんとかやり遂げられました。正作が背中を押してくれていたように感じています。

*3長期履修制度：大学等において、職業や家事等に従事する方が個人の事情に応じて修業年限を超えて履修し、学位等を取得することを認める制度。

— 研究成果を今後どのように生かしていきたいですか

正作の自己犠牲の精神は老若男女問わず、心に響くものがあると思っています。これから講演や執筆活動などを通じて、正作をはじめとする先人たちの苦労や精神を伝え、湯沢がもっと元気になってくれたらうれしいですね。